



阿利2
1280
巻1-2



蘿鬘上巻目錄

言詞辭差別の事
 言小五種の差別何る事
 詞小四種二種の差別何る事
 詞小五段の差別何る事
 辞小三種の差別何る事
 併静辞小二種の事
 属詞小三種何る事
 志支久活小四種何る事
 并居言とある格





志支久活小變格ある事
 變格久音須音の詞小志ノ辞のけざまノ事
 同かその辞のけざまノ事
 同久音小まで辞のけざまノ事
 同流音小々、係辞の事
 跨續の事
 て、跨續よ、ろりへきことある事
 の、辞小跨續の例ある事
 の、係をけそよて結たる格
 の、辞よて留りたる歌



一段活断止段よの、る辞の事
 て小種々の格ある事
 ての下小俗言小そよそといふほどの意を合た
 る格
 と小種々の格ある事
 との辞のけざまノ事
 仰の事
 べし、辞の事
 續言段の下小找の辞の合したる事
 せし志し差別の事

志の志の差別ノ事

ましまし差別ノ事

さむせむ差別ノ事

續詞段よに、辞ニッ有る差別事

かむ、辞ニッ有る差別事

断止段よや、辞ニッ有る差別事

續言段よぞ、辞ニッ有る差別事

連辞ノ事

強辞ノ事

強辞の志の下をむの辞よて受るニッの格有る事

つるぬる、辞の下みかなの辞を會たる格

は、ぬより志支又、活詞のつゞく格

せむたむ、辞事

けらしならしからし、辞事

言を省きての、辞をうけたる格

は、辞ニッ重る時ニッは續詞段よ云例

歎辞のふもやノ事

同よ、辞ノ事

冠辞ノ格ノ事

對へていひかくる格ノ事

續言段を重ねるときハ續詞段とふる事、
や何とぞぢむる格
五十二丁

かその辞の事

變格奴音の属辞を仰とりふる事

續言段ふむるを辞をうくる事

願の意のこそノ事

断れたるごとく聞えて切れたるよハあらぬこそ、
事

こそ係を找みて結ぶ事

并こそその結正トウらぬ事

未然段ふかゝるバ、辞清濁の事

かて、辞の事

べらなるとつゞく辞の事

まもあれとつゞく詞ノ事

延詞ノ事

二重約ノ事

古体ノ歌ふまよていひさして餘情を含ま格

上においへることを再いふときの辞も含めて聞

く格ある事

最希より常の格も異なる居言ふる事

象一いふそを千々小轉一萬又活れとのハ辞ふりしれ
ハ辞ハ言詞の精神よて言語の大宗なりよく學ひ明小
辨へざれば歌よく又のくことハさらなり古書を見る
まも委曲ふる意えあなきとのなりと辞をいふ名目のこ
まらなり他国の字又もあを弁へざればひあのこと多
きよ一ハ五科八等因説にくハ一くいへるをえよ

言ハ五種の差別ある事

言の五種とハ形言様言合言居言略言是なり形言とハ
山川草木などらへて其形あるとを号けて云ふ次ハ
様言とハ春夏秋冬などらへて其形わなくとも造又夫

とき一定りて動りざるとのを号けて云ふ次ハ居言と
ハ四種の詞の活を續詞段又て云居て言といへるを云
ふ霞烟紅葉時雨ふとの類なり紅葉時雨の類もいと詞
ひふたきことと思ふゆれとこの類いと多し古今十五
去くれつことも思ふゆれとこの類いと多し古今十五
逢ふそとびききことハ古言音義といへりこととを次ハ合
言とハ言と言とを合せて一言といへるを云ふ山川舟
人春霞などの類なり濁るなりこれ清むときハ放れ
りて山の川舟と山と川のここと舟と人のことと又居言
を形言ハ合せたるなり居言と居言と合せたるもあ
り居言を形言ハ合せたるハ通路釣舟などのことハ居

言と居言とを合せ多るハ有明起臥ふどの類なり次ハ
 畧言とハ詞の活きを畧きて言ふいへるを云歌束淀ふ
 との類なり古事記ハ拳鬚至于心前云々延喜式祝詞に
 ハ東穂足穂云々萬葉集　まつり川七瀬のよどハよど
 むともてれハよどまた君も一また等ふとある是なり
 又地名も暫く言の類ふこ、ろ、う、べ　地名ハ係る辞と
 こ、ろ、も、丸、て、言、ふ、い、ま
 い、ろ、異、な、る、こ、と、な、り
 詞又四種二種の差別ある事
 詞の四種とハ四段の活一段の活上二段の活下二段の

活是なり又二種とハ變格志支又おきなり上ハ四種のハ
 類別又ハいひひが多きゆえありけりて四段の活とハあいろ
 故別又ニ種といふありけりて四段の活とハあいろ
 元四韻の段ニ涉りてか、かきかくかけさはさまさ
 させた、たち、たつたてふどのおとく活くをいふ次
 一段の活とハ伊一韻の段なるれ添りてみみるみれき
 きるさるふどのごとく活くを云ふ次ハ上二段の活と
 ハ伊宇二韻の段なるれの添りておきかくおくるかく
 れかちおつおつろおつれふとのおとく活くをいふ次
 ハ下二段の活とハ衣于二韻の段なるれの添りておけ
 あくめぐあくあせあひるあいれふとのこと

く活くを云ふはてまたト變格詞カクとハ上の四種の詞の例
小變トふるをいふなりそは久音來トといふ詞ハコきクく
るクれクと活く中マてキくクるクれクと活くハ上二段の
活クまナらウ上ノ於ノ韻ノごク活クが則變トなりて凡
於ノ韻マでハ及スるガおウつカうナるをおモふベと
凡テ於ノ韻マでハ活ク用キるガおウつカうナるをおモふベと
も奇く妙なる理ありコトハいとハいとハいと
おカけル活用本身考ムつレるを見テ知ル又須
の音ノ為ト云詞ハセ志出るルと活ク中マてセ志
出ルれト活クハ下二段の活クまナらウ志ノ音ノ活
の加モたラるガ則變ナり又奴の音ノ去ト云詞ハおにぬ
ぬルぬレと活ク中マてぬぬルぬレと活クハ下二段の

活クまナらウらナ加モぬノ三音の加モたラるガ則變ナり
又流音ノ有コいふ詞わらぬレと活ク中マてら知
るレと活ク中マてら四段の活クまナらウ断止段を其ノ音お
云ガ則變ナり次お志支又久の活クと片萬ク形状の活クを云
ふとを又音雜トもいふよハ都テ何レの活クも久の音
ハ久の音ノ一行須音ハ須音の音ノ一行のハ活クまナらウ外
の行を一音も雜へさるものなるをおり活ハ伎令ハ善
といふ詞ハよくよくよきよけれと活ク中マてくきの
久音なるを志ノ音須音ノの雜ルガ則音雜ナり久音雜詞
久活り外ハ久活太久活といふ
二種あることハ未だいふべいふ

詞の五段の差別ある事

詞の五段とハ未然段續詞段断止段續言段已然段おれ
なり未然段とハ持み然せむとある意又然せざる意
をかねたる段おれおれおなむむやあど此辞をかくる
ときら願の意おれるゆゑなむかさなむゆらもやかさ
むやあどのおと一次の續詞段とハ必次の詞又ついで
仮令バちりやく云々おもひてび云々などのごとく又
其段の辞をもちく又仮令バちりぬる云々思ひつゝ云
々あど此ごとく一次の断止段とハ治定て切るとあり又

其段の辞をもちく又仮令バちりぬる云々思ひつゝ云
々あど此ごとく一次の断止段とハ治定て切るとあり又
此ちる人おもふなどのごとく一次の續言段とハ必次
の言についで仮令バちる花の云々思ふ人の云々など
のごとく又其段の辞をもちく又花のごとく一次の
るを云々人を思ふおななどのごとく一次のかそやかの
結ともなる仮令バ花をちる人やおもふなどのごとく
一次の已然段とハ未然段の表裏又ておとや此辞をち
るときは已然あることなる仮令バ未然段又て花を
おむといへば咲るを見お行むなどいふことなるを

この段ふて花さけがといへば咲けハ人のとひくるな
といふこと、なるまて知るべし又こそその結ともなる
仮令バ花こそちれ君哉こそおもへなどのことしハの
五段ハ四種二種ともひて然ふりこゆ五段十五等の
圖ハ合せてあしるべし

辞又三種の差別ある事

并静辞ハ二種ある事

辞の三種とハ動辞ウキテニラフ属辞クハヒ静辞ウツク是なり動辞とハ未然段ハ
うゝる辞又てハぢぢぢぬむむむめよせまゝまゝ

相まじり續詞段にあらる辞又てわけき走と是の
四つあり次ハ属辞とハ四種二種の詞の活きさまハ專ら
同一くして続くところも受る辞も都て詞のむよくなれ
は何の詞属と云則下二段年音の属變格流音の属下二
段都音の属變格奴音の属四段不音の属同年音の属志
支久活の中久活の属同志久活の属是なり次ハ静辞と
は言詞の下を受けて動さけるを云ふ是よまの上の係
よなると下の結よなると二種あり係よなるいかにを
ははのがそやあこその十一なりその中かにをばはよ
りのあそやあの方重ければこの二の重れるときわの

かぞやのれ結又またかふべし又もにをはハ又こそ
重るときはこそその方重れハなほこそその結ふまたか
ふべしのかぞやのれとこそと重ぬあるら誤かり一首の
のかぞやのれ結をとりめてまたこそのかかりた次
るは一首の中にも例あることとてくるしからば次
結びふ成る辞ハ動辞并属辞ハ四種の詞と同トく則本
同のごとし静辞の方々翼同ふよりて走るべし其うち
初学の筆はたどくしあるべきを二ついふむまづ
の辞ハもにをはむのかぞこそ乃結ふなりてやあの結
ふらなりげやあの結又らしを用ひあるらいと誤かり
詞玉緒又や何かど乃結ふはらむのいおふくしてらし

ハいといと稀ふり後撰又こひてあをむとわとふ
くれぬたなをたつめぬらくやあるらしこれも一本
るのくぞあるらしとあり云々今按ふまいとまれし
見え多るハあといく誤りて後撰なるも一本の方正
きなり玉の緒ハや何の係とてらしと結ひたる證とて
引れ多るは新勅撰一首後拾遺一首家隆卿家集一首新
千載一首合せて四首見えたれどもおれら何れも未の
撰集まゝ家の集なるとて古格みたりひさるるこれ
きやありきやおれらハいつれも證とてあふし本
つ意をおしあきらむるときはやあなどの結び不用

き辞ふあらぬことかのづら明ふるとのをやくは
くハおのが著せる助辞音義考よいべり
本つ意を明る極めざれば末の撰集なと用格の違
へるうよれく見えぬるもそれやうてひとつ格
の必そく思ひまうへていともたどく
はありの字則まご神代の手
都々ふ委しく論ひおけむ
心をははの結なるわ

亭 たつを川もみち系流る神多びのみおろ山み志く
川ふるら
同世 みやまふいあれゆるら 外山あるまさきのかつらあけふれる
その結なるわ

後撰田 なてーこ乃苑ちりうぬふ成ふりし我まつ積でちうくなれら

こそその結なるわ

亭 ぬきいたるくこ紫あるとーあむりまなくもちるうそてのせきあ

未然段 を受る志の辞はぢあらまの約なれバもあをば

の結とルありまと言もつー格なり 轉この志をなるり

いふ説きいまる

心にをまはの結なるわ

亭 高君こびちねやまらこむトヤまゑえ結ふあわくとし

同 こいりなばたう名はた 世の中つねなきとめといひわなひも

言よつけるわ

後撰五白川のたきのいとよほれとみたりふをよせ

てうまれうまるうまる、うまるれと活くときち自ら
然ある意となりて子の母より産る、を云ふれよて
よし、糸ふべこの属詞、よく心よと宛かりされば
誤ることおほきとのよて世お歌よくよ、文めでたう
のけりとゆるされたる人、此誤をきよくまぬられ
たりと思はる、は見え交つ、子上の件をもらみ味ひ
てその正しきとあらぬとをあきらむべし、はて此つ
てみよきまへ、かくべの詞の八衢ハことばの道の
えをりの又なき書よ、何れどいその中よ、いさ、あつ
き、よりもあり、げ、おのが、か、る、詞のハ、ち、ま、た、補、正
ふ、く、ハ、く、糸、へ、お、き、た、り、歌、文、の、字、ハ、更、な、り、ち、ま、た、補、正

とむの字せむ人、このふ、必、み、よ、然、この属詞のきを
云ふハ、お、の、が、を、し、へ、子、の、ふ、き、り、で、然、この属詞のきを
にいたりてハ、猶、お、ほ、し、志、く、て、上、卷、よ、佐、行、下、二、段、の、活
詞、と、て、あ、げ、ら、れ、た、る、つ、よ、せ、さ、い、る、と、此、を、一、の、詞、と
し、下、奉、ら、れ、た、る、ち、誤、な、り、必、り、る、さ、り、る、と、二、つ、よ、出、し
お、く、べ、き、処、お、り、枕、冊、子、三、月、三、日、頭、北、辨、柳、の、り、つ、ら、を
せ、さ、を、桃、の、花、の、は、し、よ、は、し、を、櫻、こ、し、よ、さ、い、せ、な、ど、
て、あ、り、の、せ、た、ま、ひ、し、を、云、々、と、あ、り、此、中、せ、さ、を、の、せ、は
為、よ、了、覺、格、の、詞、な、れ、ば、き、せ、と、受、け、き、い、せ、の、さ、い、は、四
段、の、活、な、れ、ば、せ、と、受、け、あ、り、の、せ、の、り、の、も、四、段、の、活
な、れ、ば、お、な、ど、く、せ、と、受、た、り、の、く、一、つ、づ、き、の、文、ハ、此、け

ぢめいとよく知られて見えぬをや猶いも宇治拾
 遺十卷又主上御笛をあそむるにやう調子を
 へてふら^レを給ひらる云々明暹調子異又こゑたおへり
 あげられば云々御笛をたびてふらせられは^レと何
 りこれ初のふら^レを給ひらる敬ひ詞又延たるなり
 後なるら明暹をしてふら^レめ給ひけるおていもゆる他
 を然せさける詞なりおまら^レて委しく心うべ^レ又此
 属詞の中又一種あり下二段流音の属詞と申同由音又
 再び轉りたるなりえ々四段の活の思ふといふ詞の上
 の如く下二段の流音又うつておも^レれおも^レると

なりたる字おも^レれのおま^レ一音扣ふまほとなり
 音の分生る此頃ハウオアエイといふ頃なまはそれ
 又あ^レひ^レ上^レなりれを韻又て一韻扣ふればえとなりて
 てハを^レ一音上^レなりれを韻又て一韻扣ふればえとなりて
 轉ハ時ハ^レなりれを韻又て一韻扣ふればえとなりて
 この音韻又ア^レイの頃又徒ひて何れ^レの行りも一音上
 必堅^レウオア^レイの頃又徒ひて何れ^レの行りも一音上
 の方^レウオア^レイの頃又徒ひて何れ^レの行りも一音上
 横^レウオア^レイの頃又徒ひて何れ^レの行りも一音上
 ふ^レウオア^レイの頃又徒ひて何れ^レの行りも一音上
 又行^レウオア^レイの頃又徒ひて何れ^レの行りも一音上
 のこと^レウオア^レイの頃又徒ひて何れ^レの行りも一音上
 生^レウオア^レイの頃又徒ひて何れ^レの行りも一音上
 おも^レほえとなりおも^レるのほ^レ同^レくほ^レとなりるを
 一韻扣ふれば由となりお^レもほ^レお^レもほ^レなるそれ^レの
 そをりてお^レもほ^レえお^レもほ^レお^レもほ^レわ^レお^レもほ^レわ^レら^レ

轉リ活くなり又一段の活の見といふ詞の上の如く
下二段流音又うつりて見ら^レき見^レちるとなりその^レり^レき
の約りて^レれとなり^レちるの約りてるとなりその^レき^レるを
ま^レぬ韻又て扣へて見え見^レ由となり此の二つとも則下
二段活由音の属詞あり万葉又所射^レ穴とある^レる^レ書紀以
由^ニ之々とある^レふよりてイユシハと訓むべ^レーさてこの
い由^ニ去ハは射^レれたる^レ猪鹿をいへる^レ又て^レいら^レき^レのい
ハ一段の活の由音又て上のごとく下二段流音又轉リ
て^レの^レら^レる^レの^レる^レと約りたる^レを韻又て扣へて由といへ
る^レなればこれら見えの格又異れることな^レり次又変格

流音の属詞とハ四段の活ま^レぬ志支久活の續詞段より
變格流音に轉^レり活くなり外三種詞より四段の活より
轉^レる^レる^レ續詞段の^レき^レ去^レち^レひ^レみ^レりの音にての辞の^レか
りて變格流音の有といふ詞ハ轉^レれる^レなり又音又て^レる
か^レきて^レあ^レい^レむ^レか^レきて^レありと云^レきて^レの約りて^レげと^レあ
り^レあ^レの畧^レの^レきて^レ下本音アイウエオの五音ハ中^レち^レか^レけ^レら
む^レかけ^レる^レとなる^レなり須音又て^レる^レか^レて^レあ^レい^レむ^レか^レて^レ
ありといふを^レきて^レの約りて^レせとなり^レあ^レの畧^レの^レり^レて^レか
せ^レい^レむ^レか^レせ^レり^レとなる^レなり余^レち^レ準^レへて^レ知^レる^レべ^レし^レこれ^レ
段の活の已然段のゆ^レせ^レで^レへ^レの^レれ^レより^レつ^レり^レあ^レり^レと^レこ
らえ^レい^レら^レぬ^レる^レ人の多^レきは^レい^レみ^レト^レき^レ誤^レなり^レそ^レハ^レ續^レ詞

段のきまぢひのりどりの辞と約りて自らけせてへの
むと成ればあふ思ひ誤るなり然れども萬葉に
而有り字をりけるよても又此の詞の意を思ひても續
詞段よての辞のりかよて約することちあなきものを
や又志支久活より轉れるる續詞段のく^く走^くの音より
變格流音の有といふ詞よつゞきて久活よて^よく^くあ
ら^らよ^よく^くありと云をく^くあ^あ約^約りてかとなりてか^かく^くむ^むか
^ことなるふり^り又^又久^久活^活なるも^もこ^こき^きこれは萬葉に有の字
を^をかけ^けて^て凡^凡て^てこの^{この}属^属詞^詞の^のこと^{こと}ハ^ハ八^八衢^衢翼^翼因^因又^又つ^つげ^げたる
圖^圖に^に合^合せ^せ亦^亦よ^よべ^べし

志支久活の四種ある事并居言となる格

志支久活の四種とハ八衢ハあげりきたる久活志久活
の外ハ久活多^多久活とハ二種^{二種}あり合せて四種^{四種}なり
久^久活^活とハ^ハ仮^仮令^令ハ^ハ遠^遠け^けく^くま^まる^るけ^けく^くなる^{なる}け^けきを^{きを}る^るけ^けき
の^のと^とけ^けく^くの^のと^とけ^けし^しの^のと^とけ^けきの^{きの}と^とけ^けき^きと^と活^活く^くる^ること
多^多久^久活^活とハ^ハ仮^仮令^令ハ^ハう^うれ^れた^たく^くう^うま^また^たく^くう^うま^また^たき^きう^うれ^れた
凡^凡ま^まめて^てた^たく^くめて^てた^たく^くめて^てた^たき^きめて^てた^たれ^れと^と活^活く^くる^る
こと^{こと}し^しち^ちて^て久^久活^活の^のく^くく^くき^きれ^れを^を省^省きて^てハ^ハみ^みと^となり^り志
久^久活^活の^のく^くく^くき^きれ^れを^を省^省きて^てあ^あさ^さと^となる^る但^但し^しこれ^{これ}ハ^ハ互
る^るなり^りは^はべ^べて^てに^にま^まら^ら乃^乃こ^こと^とハ^ハ又^又け^けく^く活^活ハ^ハか^かと^となる^る仮
別^別又^又因^因よ^よせ^せる^るに^にま^まら^らり^り又^又け^けく^く活^活ハ^ハか^かと^となる^る仮
令^令ハ^ハ久^久活^活よ^よて^てハ^ハ月^月き^きよ^よみ^み山^山高^高み^み志^志又^又活^活よ^よて^ては^はう^うれ^れし

さるなりや久活^マてはもろのぞのななどのごと
いつきもかくなるときは言の格となりて辞も言の辞
のかゝる格なり

支テリ^マリ^マア^マの^マてふるさとの家ある山の風を^マヤ^マふり

けてまた志支久活を居言とれる久活志久活により

て差別あり久活^マ畧言^ママ^マて言ふ合^マり速山廣野清滝

川短夜^マ類ありこの活を重ぬれば志久活となるな^マカ
越^マな^マの^マこと

志久活^マ断止段をもて居言とれむな^マ煙^マなる^マ夜^マ

同^マ心^マさ^マの^マ女^マは^マ妹^マの類なりさて又な^マといふ

詞の^マ久活なれども志久活の格^マとひとく断止段

をもて居言といひそハ友^マな^マ千鳥^マ間^マな^マかたよなどの

類あり又古事記^マみさびな^マ小あをれ古今^マの^マむ^マの^マ

といふ^マ同^マほ^マと^マぎ^マけ我^マと^マな^マみ^マなど言の辞の

かゝりたるもな^マよて云居^マた^マ言の格となりてに

辞^マのかゝるなり又あたら^マといふ詞とむな^マとい

ふ詞の^マハ志久活なれども久活の格^マとひとく畧言

小^マて言ふ合^マりる格ありそハ古事記^マあたら夜^マの

書紀^マあたらた^マ同^マあたら墨^マ繩^マ後撰^マあたら夜^マの

月^マと花^マとを云々又むな^マの方は万葉^マ又むな^マ手源氏^マの

むな^マ車^マみどの類なり但^マむな^マの方^マ猶断止段^マをも

て云居たるもありそ、古事記ふむな、舟古今ふむな
川烟などいへり何たら、の方、必畧きて言ふ合れる
格なりはて又このむな、烟、夜などの格を言華
翁ハ活を省けて言ふ合せたるなりといふをきぬれども
うべなひがた、おのき考へたることありて云居て言
お合せたるといふ委しくはおのが著せし活用本義考ふ
いへるも見て弁ふべ、又なし、心いふ詞ハマアと諺
譯して、れいよきこあるな
り、義門が、いへるちよる、古今ハと、いふべきとの
は、な、み、を、なく、もち、る、花、ごと、み、た、く、ふ、こ、い、ろ、同
ほ、と、い、ぎ、れ、我、と、い、な、い、ふ、う、の、花、う、き、よ、の、中、ハ、鳴、り、女
る、ら、む、万、葉、ふ、み、よ、の、の、青、根、み、も、り、こ、け、い、し、ら、た
れ、ら、お、り、し、む、た、て、ぬ、き、
な、し、み、な、と、又、て、志、る、
な、し、み、な、と、又、て、志、る、

志支久活小愛格何事

此ことと云詞ハ志支久活の中志久の活み此ことと云
こ、此ことと云、き、な、や、活、く、べ、き、詞、と、見、え、て、字、鏡、み、値、小、貞
須古志支奈留と何ふても然かもる、を古きとの
に、此ことと云、いへる、け、い、と、お、ほ、く、て、此ことと云、
く、と、や、う、ふ、いへる、を、さ、く、見、え、さ、さ、て、あ、い、活、く、詞、と
も、い、あ、べ、て、詞、へ、ち、何、ま、く、何、と、連、く、定、り、な、り、や、ハ、た、と
へ、心、む、な、く、い、へ、る、心、む、な、く、い、へ、る、見、る、こ、ひ、く、思、ふ、と、や
う、み、い、ふ、例、な、り、然、る、み、源、氏、桐、壺、又、女、み、こ、ハ、此、こ、
此、こ、給、へ、る、帝、木、み、此、こ、又、木、や、夕、貞、み、此、こ、物、の

心を思ひ忘るといへるなほを考ふるに此、サ一といふ
詞ハ其例たがひて聞かるなり又辞のちもつゝななどを
断止段よりいひつゞくるも外の志久活の例又同一か
らハ帚木卷又此こ一ハ見せむ同卷又此こ一ハつゝかこ
リヤセなど皆異なり故今この詞を志支久活の变格と
して別々一種ヲ定むるありこの説は大方山口榮ヨリ
ていへるなり

变格久音須音の詞又志辞うけさまの事

動辞の中よてけき志^〇志^〇活^〇辞ハ四種の詞とも又
あべて續詞段あかゝる辞なるを变格久音須音の詞の
未然段あうゝて久音ハこ一^〇こ一^〇ハ須音ハせ一^〇せ一^〇
ハといふ例なりのこ^〇知^〇知^〇志^〇志^〇活^〇活^〇く^〇ち^〇け^〇き^〇
ハか但一源氏物語神卷又またるゝ方なくき一^〇方行末
などツへる類のまねくゝるなきあ^〇志^〇もあ^〇り後拾
遺五の詞書ハ九月の十日あまり又あかつきちかうな
るまで人々あがむるなき一^〇方行末もかゝる夜ハあら
ハな^〇い^〇ひ^〇て^〇よ^〇う^〇を^〇べ^〇り^〇ル^〇と^〇あ^〇る^〇も^〇同^〇一^〇然^〇れ^〇と^〇大
方ハこ一^〇と^〇つ^〇ゝ^〇く^〇つ^〇な^〇り^〇須^〇音^〇の^〇方^〇ハ^〇志^〇一^〇と^〇つ

いきたるわたえてあることなくはてせしむつしき
たり言幸舎翁の説又即方なごつしき多るがかな
小馬りとき来をきよとよきてきしとらきひめたる
て支べてきしつこくここハあぬ格とこいろえお
さるこさよもあるべし

亭人ふるり里をひて二かども奈良のれもうきなりり

同今こせあぬ我もむのし山さうゆくけもありこし

同花の名はうつりよりふいごつし又春身よふなるあき

同ふその辞のけはま性事

勿の意なるなそとつふ辞ハ四種の詞ともなべて続詞

漢原音キヤウ
次音カウ
吳原音キョウ
次音コウ

段よか、りて四段活よてハハふハおやきとふきなち
らしととやうふいひ下二段活よてハ人ふとがめとこ
えなきうせととやうにハふべき格あてそれふ準ふね
ハ度格久音よてわなきととふべき找さはいを不な
こ和といふ格なり宇津保俊蔭よそれ孝の子ならハ氷
とけていをつ下二孝の子ならはないでととて泣
くそええたるよて走る魚し須音よてはなと和といふ
べきをさハいを不なせとといふ格なり鳥坐同活れ
同志くおあもせと和といふ格なり然るを世の人文章ふ
どにおおあもし和といふ格なりし見ゆるはいとち
やみり子も同卷ふ天狗のりるよこそあふめなおとせ

そと見えぬるふて去る座

同久音よまでの辞のけりまの事

カ葉一尾中其あり
静辞ふるよでの辞ハ四種詞ともみあへて続言段ふる
なり神みこしむる
あれははせむ加信
一吹麻泥尔
十九春日野つづ
もろの梅の花宗
りよてかくり未
泥尔
れハ常の格也

静辞ふるよでの辞ハ四種詞ともみあへて続言段ふる
なり神みこしむる
あれははせむ加信
一吹麻泥尔
十九春日野つづ
もろの梅の花宗
りよてかくり未
泥尔
れハ常の格也
いふ格あり万葉ふかへるくおてといへるが多し凡て
変格詞ハいをむる常の格ハ変ある詞なまハ辞のうけ
がよもおのつから常ふことなるふとありとえるべし

変格流音の事

変格流音の活ある有といふ詞ハ四段の流音の活も同
くて断止段をありといふが則変なり然れども断止段
の辞ハ凡てあるといふ方又のいかりてありの方よ
ハと并や切なりハの二つのいかり格あり但してふは
といふの約なれバそのつちをハちとつたりなる也との例
てありの方ふかへるざりたりありなどいへて此の詞
の属辞もこれふ同くともやうふの辞ハ其ふかへりそ
の余は出でてゐる方ふかへると知るべしこはよく并
へおのぎまハ終もしきことありこゝろおくべし

跨續の事

跨續の格は動辭にて下二段都音の属詞なるてと未
然段の辭の如と二あり詞にては志支久活の如静辭と
ていつゝ如の三あり其の如て詞のうへにてハ次
の言よつゝきたるがぶとくにて其意ハ必次の言を跨
了詞のところまで及ぶと知るべし此格古文にもを
しつゝることにてその例をひとつふたついゝハ出雲
國造神賀詞二百八十六社坐皇神等手某甲我弱肩尔太
禘取掛天云々志都宮尔志都米仕奉尔とありこも皇神

大分県音

等手某甲我云々といつゝらば某甲我云々の文をまた
きて志都宮尔志都米仕奉といふ所へつゝきたり又同
文は天能八重雲手埤別尔天翔國翔尔天下手見廻尔と
なりこれも翔尔天下といつゝかハ天下をまゑがて翔
尔見廻といふきたるなりあれらゝて走るべしかゝる
格あることをこまかふあゝろえおろざれば古文ハ心
由きおたきことおほしされハ心ト絶又言語の格をよ
く学び明らゝ弁へさきハ古書を見るふも其細れる意
えがたきとのをといへるちこきちやがてその中の一
つよりあるが

ての跨續なるハ

亭 くらうるなく利のなき系刺立ちて藤や一人をいつとあやらむ

同 よひくにぬきて我ぬるうも衣かけておももぬ村のまよしな

同 人やりの道ならなくふ丈のまはつきうといひていさかきりなむ

仰の跨續なるハ

亭 山さうつふあらしは吹甲いゝむひもあけ川花でちりる

同 天の川まの水脈もてもいれりきりともめ日月てなわ

くの跨續なるハ

亭 物へは家わもねば鳥のなふるまをあたな

同 十わびくのてきくすよるこのもとは新むかひな紅葉ちりる

万葉
一長

うけのよろしく遠つ神我大君のいでよの山の風の

ひとりをとるあや夜もふ針夕子。昼らひのれハ云

つゝの跨續なるハ

亭 夜もやむいおく初おを拂ひつゝあまの松みあまこちひ初ぬ

同 旁羽山おとあきつゝおほの関のこなぬふとをヤラうれ

仰の跨續なるハ

亭 石上ふるの早田をひでびともなしたまを届よ守つゝをよむ

同 ぬまをりる山路の菊のつゆのふつろち年たあくくもれむ

同 とふとりのこきもきこぬる山つぼきんをひともを走くぬむ

仰の跨續なるハ

夢 走らむとくえりなくぬとやれ^レか^レくれなるあまのいほを
同 久うぬのあま乃かはらのほも君のありなほ^レう^レらう^レてよ
同 走らむのとくもそのびさう^レは^レい^レもほもさく^レ花と^レれ

ての跨續ふ心得べきことある事

伊勢物語十九段ふ苛をとこやまとふある女を見てよ
むひあひふるまはてほどへ下宮つうへある人なりル
きバカへまくる道ふやよひむらりみか屋て乃もさち
のいとおも走ろきを折下女のもとみみちよりいひや
るこれら^レはとへでり下ふ宮づかへあるといふ詞は

あれどこのぬるといふ所へちつゝかびしてかへる未
るといふ詞みつづけりこの類く^レつゝ^レを^レ心^レ等^レの^レ跨^レ續^レ
まも例ありよくく^レあ^レろ^レえ^レお^レく^レべ^レ

の辞ふ跨續の例ある事

の辞の跨續ハ前にいへるで^レく^レけ^レつ^レを^レ心^レと^レ乃^レ如^レく
必言哉跨きて詞ふつづくに限りあるま^レい^レあ^レつ^レ古^レ書
の中ふもをり^レ跨^レきたる例あるなりそち万葉十ふ
心なき秋乃月夜^レ物もふといの祢^レと^レめ^レり^レり^レつ^レ
もとな出雲國造神壽詞^レ高御魂神魂命能皇御孫命亦

天下大八嶋國手事避奉之時後釈云この乃ハ次なる事
御孫命へついでに能御孫命へついでに能多鎮大祭詞ニ吾名妹乃命能
吾手見給布奈止申手吾手見阿波多志給比津とあるか
こと一この外猶いと多し

の係を八事小て結たる格

の辞ハのがぞやか係辞又ても最輕らきばもにをはは
の係辞の類も通ひて結をけりといひてけるといも
ざるがあり

新嘗むらぶふ新いぬれり山のおれあうても月うらむふ新

金一 ちりかふるはをきい雪のこち下花を袖のぬれぬありら

の辞みて留りたる歌

の辞又下留りたる歌ハ大方上ふりな^〇て切取たる
下ふあることな^〇はさ^〇りぬ^〇る^〇は^〇い^〇の^〇ひ^〇あ^〇き^〇を^〇り

冬五 ふきまよお物凡をもく^〇村をま^〇け^〇う^〇つ^〇り^〇も^〇ゆ^〇く^〇人^〇の^〇こ^〇ろ^〇の^〇
集集 物うひせし駒の春よりあざりあつぎけもあるれよどのまこの

深美 あふまねてつとあまくもゆるるれあやめもいなるねなるの
葉花 とくとだみ見えぬもあるれ冬^〇の夜^〇うら^〇み^〇ま^〇の^〇は^〇の^〇

一段活断止段ふかゝる辞の事

詞八衢上の巻に云ふもトをそ慮てきるに詞とつゞく
詞とをう祿たるに後の定めてあるに万葉十一春野
のうもきつして煮良志も又古今花とや見トす六帖松
の枝のときをみ似べき後撰来て見べき人もあかトな
土佐日記に似べきあど見え云々義門云後々の定めとい
ひたてあるらあゆめいひぎまふりこちるもトをそへ
てきるに詞とつゞく詞をうきたるをまつ大方の定ま
ながく古くより後まで万葉の春野のうもきつして煮
良志も云々オニの音をバべきらむふと受たるもまこ

松の枝松柏り
誤ふり

かゝるしとやうみひたたらやそよるゆきといふる
ふよるゆき然れどもこの断止段ふる文字をそへてい
へるといへざるふつき辞の受方ふ二はの差別ありキ
ハまほ此段ふる文字をそへていへる方ハ断止段の辞
かゝる例なるをる文字をそへざる方は断止段の辞の
らちよてべきらむ^ハの四つ此辞のいかりて
の外の辞はかゝらざる例あり詞八衢聖因に合せ心得
べし

科にて種々の格ある事

て、辞の下小言を含めたる格あり

こは歌又ハさらなり古き文又もをり見えたる格

又て大被詞天津金木手本打切末打断氏千座置座尔

置足波志とあるハ本打切末打断氏千座置座尔依利其

千座置座尔置足波志といふ意又打断氏とあるての

下ハ千座置座尔利利といふ言を含めたるなり天津金木

置座尔依らむとの料あり次の千座置座尔云とハ被津

物も置足ハハハことなれハ之の間ハ置座尔依るよりの

言のあるへきを氏の字の下また祈年祭の祝詞ハ遠山

近山尔生立留大木小木手本末打切氏持参来氏云々と

あるも打切氏とある下ハ中間手といふ言を含めたる

るなりナ、きりみ下たる魚し歌ニ也

亭 おと子のきくのお海よるナケキ下ナケキひおひおナケキハハハ

同 月やぬ春やむうの虫なりぬ我身ひとりトトハハハ

てを合えたる格あり

亭 おまのあなぬうなをまをれトとろとろとくたぐたぐれ

同 立かへりトあまれとそおふとてふてもくふとてふもおきろふ

て小言の辞のうゝる格あり

亭 梅のさきさきでの後の身をなれやゆきもはとのくついで

同 ちもてより風をよきたつ浪なれやあふことなきまき

同 ちもてより風をよきたつ浪なれやあふことなきまき

同 よきふのいあされとてふー梅の花あぬいろあせりてなるルリ
とてよてので

とてよてのでいでの上ふ必詞を含む格みとて下の方
はつふおもふふどの詞を含むていひひて「とおもひて
となるなま又よての方は必変格の詞ふる為といふ詞
を含むて「よてとなるなり

亭 やくら花ちるちるなむちりけとてふも人のまてのみなくみ
同 今とて「ふるときり天の川渡ぬさきふ袖をひわゆる
同 花のちりみあやとて「けり心とともふちりぬてなる
瘡記 ゆあふどせむとて「ちとまよろきあみそ

亭 久しむれをの上とて入るまはけある早くとちやまたれぬる
同 おまのハへみうなるをちりておむくふそちへたつな
瘡記 もー海道とて「よやのーうはえ
てより上へ意のひる格あり

亭 いて人ことこのしでよき用るのうつーそちいれをよ
五葉 よしねなるなるけり川よに鴨を鳴ふるふうけりて
て下は俗言よてれよりといふほさの意を含むた
る格

ての辞ハ語勢とちるめて上へ意を下へおくりつー

る意あまは下の下は俗言ハ夫よりといふほどの意の
含まりたるが有りそは鎮火祭祝詞ハ國々八十國嶋乃
八十嶋生給比八百萬神子生給比麻奈弟子ハ火結神
子生給ハ云々また古今のみたまは柳やしらもなき
まごで都ぞもるのにまきなりらほこまらハでの辞又
下猶語勢もゆるめ下ふあハれと含めたりこの類猶
あふ

とに種々の格ある事

のハそやあの係もそのはたあれる結んで結ひたる下

よどの辞もあハれとき下への結まのハは受

後撰 上のやとあすハれの花のおほらまハまきやどる人やあるとまづハ

拾遺 志のふねどまふ下下ルま我ハひくおやとよとくのとよまア

どの辞はあハ下断止段を受る格なるも志支久活又ハ

續詞段もこの辞のあハ例ありたとくハ遠くとも

近くともなどのこと

この外ハ多くまた詞を省きて意を合めたるも

古今 かつねとハ時をそのハ利ハ花を物思ハこの限りなる

源氏桐壺もハめより我ハとおもひ信る人ハやまハりまとのみ云々

まご彼と是と二つのことをつふ意なるあること
與の意より續言段ふつゞきてつねのとは異なること
暫く様言の類とこのことハ詞の玉緒に見えたり
拾遺 日のうちみやび物を思ふれとくぬるさかすくさ

との辞うけぢまの事

とハあべて切れたる所をつゞくる辞あれば必断止段
を受べき辞あるは後世の歌文ハ續言段を受たるかを
り——見えたるものみトき誤ふりよく心をざれば例
格をあやまることありとの意ハ委しく助辞音義考又

仮令ハ某の山をこゆとてとつふべきをこおるとと
誤りとトをふとてとつふべきをうるとと誤りとの
あくとつふべきをあくとつふべきをうるとと誤りとの
とつふべきをくるととあやまる類いとわると此
格古のよき書はさあふり三代集のいま下ハあやまる
ことたえまなりのりをそれより後のとのまやも
あまハあやまれるがわろく見えたりつねハ草など
みこの格をうやまれる所ことおろし心つうひせと
るいとこそ仰られぬこれハせとるこりて可な
りふなりてるとひおるいとわたりあやこれいおると

ところ 仰むるともき、いさぐこれいほむとろ人
あり、ほむるともき、いさぐこれいほむとろ人
酒す、むるともき、いさぐこれいほむとろ人
これつれ、むるともき、いさぐこれいほむとろ人
三編、むるともき、いさぐこれいほむとろ人

仰、事

仰とい、此方の意を彼方ふ云仰するみ、世に下知とい
ふ是なり、使令希求ふと名月をたて、いさぐこれよ四種
二種の活より、了たまりあり、四段の活より、已然段
のけせて、めれを其依仰とい、いつくまゆけ何をい
たをなといふあり、又これよ、文字をそへてゆけま、い

たせよともいふ例あり、宇都保物語祭使のもの、あんど
たまふよ、同菊宴きこえ、まづよ、涼氏物語うつせし、巻
けひおもひ給へよ、大和物語九段、ふふ、いよ、尺、俗は
じ詞、よて、せよ、ふとある、いさぐこれいほむとろ人
活み、下、おも、む、ふ、さ、い、ひ、て、即、下、知、ク、詞、と、な、る、と、の、い、け
ぬ、人、お、る、く、れ、は、か、く、例、証、を、引、き、て、お、い、ろ、か、く、お、く、せ
又一段の活上二段の活下二段の活、よ、續詞段よ、文
字をそへて、仮令、い、一段、よ、下、見、よ、居、よ、上、二段、よ、下、い
おき、よ、お、り、よ、下、二段、よ、下、け、よ、お、て、よ、な、ど、の、こ、と
しま、ま、變、格、久、音、よ、ハ、未、然、段、の、こ、を、其、依、よ、い、ふ、仮、令、ハ

こてふは似たりとめこかしのことし川の辞は仰か
の下をうくまこよ文字をそへてものふ人こよなど
の辞ありこの活みて已然段をその例あるが四段
のこしこの活みて已然段をその例あるが四段
ての格ながと知るべしこれらのこと詞八衢補正あり
へるを見同須音は未然段ふよ文字をそへてせよと
ふ格あり但古くは万葉十まらふをそへざるもあ
つくりあるまたりやなき同奴音は已然段のねもそ
のまくにいねなといふ同流音は已然段をそへ
まゝあれといふ又志支久活はかれと云あしられ
よられふとのことト久活のつみりなれは志支

あは格流音は暫く志支久の活仰り詞の八ちまゝ上卷
又云ふるくハ下二段の活はよ文字をそへ古事記
下卷歌ふ加理許母能美陀礼婆美陀礼續紀宣命はかく
おもひてはあること止等のりたまふ萬葉集二にまつ
ろもぬ國乎治跡同五ふたふ率ヤキ下あまを思良之
米同十七は阿比見之米等曾同十八はわくつきは志る
く之米多氏人の志るべく同十九は馬まし停息佛足
石哥又都止米毛呂毛呂ハ、久もろ大神宮儀式帳に
國津罪云々犯過人云々被清止定給東遊風俗哥古本
又与世波与勢與曾不流比止能示久可良難久なとも

あり今の世にてはことたれもぬおちあはれど古の
 格あり古今集のころよりこなたき此例をよく見あ
 たら交た順集をよこひる君がはしたるたふれ
 の野なすなちをやくもなをよとあるのなり一
 段の活詞中二段の活ことばる此例古へもなりと
 いちねたる今按ふよこの格猶中昔をもよく見ち
 宇治拾遺十六丁三をれ下よせとよせと云々枕冊子
 六丁人々よハせなどおほもよる拾遺愚草思ひの大
 原井べよとぬるまつことろな神の走るは古
 今集訛諧ふのぬるなぬおもひるとえはも之神だ

よけたぬひなハフルを夫木十一川て見む駒又沓が
 石原や十市の里を萩やぬめりいちこともよふぬ
 もやよせかのよる嶋の逢たまらまくるふと猶
 あるべしされハ古くより今よいたるまでの格といふ
 べくなむ

べの辞の事

べの辞ハ八衢補正回の面のごとくべのきル
 則と活きてべくハ未然段の辞よて受るうまを続詞段
 の辞よて受るうまを詞よつらくりの格なるをくよ

了断れたるごとく聞ゆるがあれども然らば是は云残
して下は意を會はたるりまへ上への意のか重なるの
二つありてよく又できたるるあるはよきことあり
うぢれは紛しよくおもはるゝことあり

亭 此もその心を交するもよきことなり
後撰 うきうらみありけりけりむむをきけるをよきことなり
亭 山風よきうらみよきことなりたれむむのよきことなり

續言段の下の戒の辞の含みたる事

續言段よりい必言ふつづくの事其段の辞のかゝる

べきことなるをての月の流るゝえねば「さきちるえね
ば月でたるい由など詞もつづく例ありこゝ續言段の
下は必むの辞の含して流るゝをえねばさきちるをえ
ねばなとつゞ定りありまたつづく詞も定りなき
又いあつて必見といふ詞もきりたるもいとあや
きことなりたが下をえかといふときちこののの辞
ふりの

同 世の中もつゞたきことと今もなる奈良の都のうつろふえは
同 もがらぬぬかきことつゞいもが鳥形えの浦もたつかるえは
同 天の海もつゞたち月もつゞたはるゝの林もつゞたはるゝのえは

古今紀思寐我歎
世にツマ他氏理
葉のこき海
出た利所見
の安牧

後撰 てる月のなごも^の又れそ天の川つるみりとい海ふがあふ
同 うそ^しとき^をか^むむと^も思^ふあ^はき^ちる^る又れよいひ老まけ
亭 け^し中^と夜^も文^ゆゆ^し一^にね^のき^こも^らう^やま^月も^るし^所

せし志し差別の事

せしといふべき所と志しといふべきところハヤ、も
あれば誤ることおほくせし初字のともものもてあや
くけよなれるものかど詞の活をたよよくこゝろうる
ときハヤらる紛ふべくもあちぬむのありせしといふ
へき方ハ下二段の活須音の續詞段よ志の辞をかけた

ると変格須音の未然段よ同志し志の辞をかけたるあ
り^{未然段よ志の辞を}下二段よてい合せし浅せしあ
どの如し変格よていなる也せしこひせしなどのこと
しよこ志しといふべき方ハ四段の活須音の續詞段よ
志の辞をかけたるなるをいたしかく志しなどのこと
しよれハ四段よ活く詞のときハ志しといひ下二段并
変格のときはせしといふとだみこゝろうるときは志
ともなし然るをせしといふと定めらねていゆるは
いなひふことありおの格鈴屋集よ志し天の川でたは
ぬさきよるちやくせしといやまられたる歌ありはこ

あくとつとさふべきところなり然れどもこれ侍十三
とトリもさふべきところあり俗言なりといはれたる
書二一巻あつたつとさふべきところあり俗言なりといはれたる
なごも然ふりの人の文などあるへきことあり今の
まろさむりかたり書なづかあるへきことあり今の
せりかいた下の人の文などあるへきことあり今の
いそるとの人も詞のたときあやまりて又とハ
おほきとりのなるをヤ

志の志が差別の事

志の清いていふと志の濁りていふとハ其意いた
く異なり思ひまがふべからず清いて志のいふ方は
けき志の活く志の子下こそその結ともなる辞あり

たとへハ思ひやめ志の云ハ俗言ハ思ひソメタコト
ガアツタモノラといふ意となる又志の濁りていふ
方ハ願の意にて後令バ志の俗言ハ又ルシカタ
ガ有テホレいと云意となるなり

志のふこそさなへとり志のつはまお穢染えよき種凡そく
同 思をち春の山へお打むけてこそしもぬたびね志の
後撰 いとて下やぬるくろいなる志のまもも君も入て

まゝまど差別の事

初学の輩未だ然段のまゝを濁りてよむハ誤なりまどと

濁りてよむ万々五種詞のままりまトとももに志支久治は二
断止段の、ありて表裏の差ありまままトの意ハありたとへ
ハ行ありましと清いてよむありま行ありまイとおもふ意
ゆくまと濁りてよむハ行ありまウモナイと人のうへ
をわししりていふ辞ありま然せトと思ふことハ
未然段まじ辞ありま行ありまトといふべき格なり
万葉 真鈿持まちま河原之埋木之不可た顕事等不有君
詞ありまこのよにまたも又ま梅ありまなまじことありまかなしき
万葉 ほうりにこえとありまあまでわくりる君が心てあらわましと
後あらわげあえたうまうあつたまふ云い

さむせむ差別の事

山口榮上卷ま云いよまざんといふべきをかよません
あまざむといふべきをあませんと誤る類ひ多し又まあ
裏ま下りをせんといふべきをあませんかこせんとい
ふべきをあませんかこせんといふべきをあませんと
あまさるたくひもサかりまこれはあまへて依行四段
の活と下二段の活と又ま格との差別をあまよくたしり
えはける誤みなまぬれぬべしといふこれ乃これ乃
なまりま何れの詞もその活用たまよくとめえぬらむま
ハまとましきふしふつマあらぬなり

續詞段に辭ニ有る差別の事

續詞段に係る辭の中、変格、奴音、属辭に、また、靜辭の
ニあり、属辭の方は、過去意の辭にて、けむに、きに、しな
と、けき、い、し、あ、と、けら、け、お、け、る、け、れ、た、ら、た、り、た、る、た、れ
と、三種の活辭の必つ、く、と、こ、ろ、う、べ、し、又、靜辭の方
は、ある、く、そ、も、り、た、る、み、て、駁、な、べ、て、い、さ、ス、ふ、い、む、春、日
野の若菜、つ、い、お、や、な、と、靜辭も、も、て、合、い、る、う、上、の、詞、に
の、い、あ、か、る、う、の、ニ、よ、て、動辭の、つ、い、く、こ、と、な、し、こ、の、差

別あることをよくこゝろえおくべし

なむ、辭二つある差別の事

なむといふ辭二種あり、一種は五種の詞の未然段に、か
ゝりて、頭となる一種は續詞段に、かゝりて、行末をお
も、ある意となる、け、て、未、然、段、の、方、は、靜、辭、よ、て、も、に、を、も
ば、の、結、と、の、い、な、り、了、の、が、そ、や、か、の、結、な、し、び、續、詞、段
の、方、は、な、に、ぬ、ぬ、る、ぬ、ね、ね、と、活、く、辭、の、な、し、未、然、段、の、む
係りたる、よ、て、な、む、と、も、な、め、と、も、活、く、な、り、の、か、け、し、む、係
り、て、け、む、と、も、け、め、と、も、活、く、な、り、の、か、け、し、む、係
と、なる、こ、と、な、し、こ、を、よ、く、思、ふ、故、も、に、を、も、ハ、并、の、か

か。かの結ともなり又言ふもつゞく例あり断れむ
止りも一言も續く格なればなりハ未然段のなむも
ちまゑ又合せてこゝろうべし。にむをば結ふなするい

亭 こひて稀よあよひで逢坂のゆふつるをんならびもあはれむ

同 飛鳥の聲もきこえぬ山うぶのきそろをひとばえられむ

同 聲もして涙もそそぬ叫もこゝ衣ものひばをちれむ

續詞段のなむもにむをば結ふなれるは

亭 かたちこや山かくれつ栞あふれんを花ふなまばなりむ

同 人まれば思へくるしおのまつむをれのいろみづなむ

同 のがそやう結ふなれるい

亭 春ことみ流る川を死とてなむねぬあゆめやぬれなむ

同 花を魚へ住こゝつといでいなばつと深き壁となりなむ

同 言ふつづけるい

亭 あやとの花みぎてふくるくちりなむ後をこひてうらむ

後撰 ぬぐるくの内ちまたつうつまの逢ひてやなむ物やあやめ

又一首の中に二種のなむもつづひたすや

新亭 やうげとも草もえなむ春日燈をたぐ春の日まらやたれむ

又一種言ふかゝるなむありこゝろそ意みて結もその結

ふことなることなし則古今集序も人丸なむ歌のひま
りなりりるなどの類なり又ふいといと多し歌より

稀なり

亭 たをとりしれやむまつまのなむれとつさむ
六帖 つまみなる涙のなうらむ人なむれをおもやまを

断止段よやの辞ニある差別の事

断止段よやの辞ニあり本図よやかくあると
おきて切るやあて續言段よかかくあると入
かある格なりや此段よてありやなやなどいふ
べき格あるを續言段よてかかへてあるかなきか

なといふ格なり断止段よやをかいること誰もおの
を續言段よかかくべきをあやまりてやをかくるこ
と近世人の文などよはをりていろをざれば
あやまることありよはてやこの方ハ歎のや下
よとてやあさまやなどのこと一此外
やハ種々の格あり委しくハおのが著せる三集類辞
よよりてあるべしこの書は例格の限りを漏さず集
の辞もいさつまびらうよ
えらるることなり
亭 妻こふる鹿ぞなくなるまみな一おのをむ野の花と走らば
後撰 うみなるぬそのみやまべの時をわつたのくれのこえつきこもや
もせ わもひるやうむをやまひとら松ちきりこといつてもいれぬ

歎辭のや

拾遺 をいむしよる多し や こ れ 心 なる 涙 も 多 す も え や は と む こ

續言段の辭二つある差別の事

續言段は其辭二つあり本因は「かく走る」たると「そ
のく走る」たると二種あり「そ」この方「常のそ」て係
なる辭ありの が そ や か し も そ こ の 方 は 語 の こ ち め 又
置て切る「そ」を「る」を「り」を「こ」を「まよふ」を
どのごとく「こ」い や か も 切 る と 係 り な る と 二 つ あ
るごとく「そ」も猶これふ同ト格あり

亭 いで 我 を 人 な と め そ 大 舟 り 由 た り た ち 子 物 思 ひ を 一
同 名 み 欠 了 く を ね り け そ を み な へ 我 お ち ま き と く か た る れ
後撰 を み な へ し る 村 ご と ふ む れ た る 謝 松 虫 の 志 の よ う 少 ぞ

連辭の事

連辭ハの「かつ」の四つなり何れも言と言との間にお
きて上下の言を連ねつゝくる辭なり其意あるく係
もなとざるなりさての「世の中梅の花などの類」ハ
「日か身梅が香などの類」は天つ風沖つ浪方との類「ヤ
ハ虫がむらやふ」ハ大原や「ほろつとぎや」たるま

などの類よて地名の中間ナカバまゝ枕詞の中間なる神風や
伊勢さへづるやカりなどの類ナりナこれナいナふナ唱ナめナのナや
ちて此四ッの辞ナててのナ通へともナあナまナうナいナをナバナい
さ、ウの差別なきふナもあナらナぬナそナハ助辞音義考ナい
へるも見て知るべし

強辞の事

強辞ハ去をヤの三ッナふり何れもこの辞ナきナても其意ナ聞
ゆればあるもなきもことなることなきか如くなれど
もこの辞ナき其意ナをつよナて調ナもナとナのふナとのなれ

ばこの格おろかおも思ひ過ナたナきことありちて起
ハ松とノナ聞ナうナば君とノナいナへナバなどの類ナをバとナまナをナあ
いナいナ削ナをナもナやナいナ又ナ又ナつナいナをナかナうナむナ尺ナてナをナあナるナもナむナた
むナルナてナをナゆナけナなナどの類ナをナしナめナのナとナまナをナあナらナむナなナどの
のナをナとはナ異ナなるナがナこナとナきナとナりナかナらナぬナもナ猶ナやナハナなナまナをナ
つナよナめナのナ辞ナのナをナのナ一ナ種ナなナまナとナまナるナ屋ナしナやナハナなナまナをナ
ばナふナさナりナやナホナのナ花ナほナとナぎナりナなくナやナさナ月ナ夕ナつナよナさ
りナやナをナあナぎナすナりナなくナやナ雲ナ夜ナなナどの類ナなりナやナ起ナをナ
いナめナをナあナきナつナろナけナたナるナやナなどナちナてナ起ナのナ下ナハナ必ナむナとナ受
いナふナ唱ナハナあナなナひナらナたナるナやナなどナちナてナ起ナのナ下ナハナ必ナむナとナ受
くナへナきナ格ナふナりナ万ナ葉ナ集ナまナハナをナとナ受ナけナるナもナいナきナらナ雑
なナしナ格ナふナりナ下ナ格ナ直ナまナらナぬナかナなナのナ辞ナのナつナきナてナ何ナとナ

あゝ人のついでに云々受ざるやどをいふかきかて云
々などいふときはむと受ざる格なりむあれこの
やすめ詞の志もトおきざあきあいつとよ通
きと乃ちりちるき世れ哥も道ある世なときよ通
あれハといへずればトイも道ありてといれたるも通
あれハといへずればトイも道ありてといれたるも通
ある世はてちかの格又た文字ありてといれたるも通
ひたれ世はてちかの格又た文字ありてといれたるも通
き格ふり又一種のものを下ハなどつれをやりむ必未然段
の辞のむら又印詞のつゞく格ありまこやの下ハ必言
のつゞく格ふり

強辞の志の下をもむ辞まで受るゝ二ツの格ある事
上よりへる強辞の下をもむと受るゝ二ツの格ありてハ

未然段のむまで受ると松とバきらバ之とり已然段の
むまで受るとの二ツなり春とハ君と引て未然
段のむまで受たるハ志辞みだり意あり已然段のむま
で受たるハ其事其物もたしつゝ云定むる趣あり次
引る証歌を考へて知るべし
亭 山く凡と谷の水とかなり如巴山つれつ花をえんまーや
同 ちる花をなまよとまるとなふあ鳥まおとまーやは
已然段のむまで受たるむ
亭 をもみまへしとてせりぐる男山ふりたてりともも
同 志たを収了きわーんの所よあれバ々へるさまるも道も志つれバ

つるぬる辞の下ある形辞を合たる格

のかがやかの係あつたつる又ぬるととちめたるを詞

玉緒は変格としてあけりたげふつる格は

変れるものかよふつるぬるの辞の意をよく弁へて

その歌の一首の意あ合を考ふるときはつるぬる

とちめたるふらあらでその下は必るぬる乃辞を合みた

ること明なりつるぬるの意はおのれ五十音の義は

助辞音義考ふ弁へたるを此格の古き歌を足よいつ

れも上よりいひつけたる詞は自ら歎の意り含まり

下必るれととちめたるが適もばる語勢ありてつるぬ

る辞のいふ下は其意尽さぬを文字の代はるぎりあ

きはつるぬるにて暫くさちめたる如くさて實はその

下は含したる詞の辞またとちめたるなり次は引け

る證歌をよく味ひ考へて弁ふべしさればもにを

はむ係をハはるぬるの下は詞の辞みて結ひたるな

り然るを世のやいなでの歌人みたり又つるぬるは

とちめたる歌のたりぬるをみたり又つるぬるは

変格とある上げたりぬるをみたり又つるぬるは

ひむきたる上はつるぬるをみたり又つるぬるは

ひむきたる上はつるぬるをみたり又つるぬるは

ひむきたる上はつるぬるをみたり又つるぬるは

ひむきたる上はつるぬるをみたり又つるぬるは

ひむきたる上はつるぬるをみたり又つるぬるは

ひむきたる上はつるぬるをみたり又つるぬるは

ひむきたる上はつるぬるをみたり又つるぬるは

ひむきたる上はつるぬるをみたり又つるぬるは

ひむきたる上はつるぬるをみたり又つるぬるは

下き上もるふあり下ハ適ひたきとのをヤ心も用ぬ
てみたり又もつたべかりぬ格也

後標 雪の牙の走ろ衣うちきつ春来ふる雪とわらわかれぬる

同 ぬちぬ身をおも何ちやうの山さきなけさをも思ひこころ

指遺 谷の戸もとちや出てつる『雪のあつみおとせて春もくれぬる』

同 ちまなるつくまの神のつくりとふれひともこひをつぬる

伊勢 よあけなばきろるもめちかむたぢけのやだきわさうせなをやう

いぬより音難の詞のつづく格

いぬより言ふつゞくりまた續言段の辞りかゝるべ
き格なれを直つ志支久活ハつゞきててをぬのれい

をぬのれればなどいへる格ありあハつもの格又ちい
たぐ異なるがたときとのかト志支久活ハ形状をいふ
詞は下外四種の詞はいとより異れ下いを様言
お近きものなれば自然この一格ハあるなり

後標 夏むの志るくましおもひまはあやぬかなとぬれをむ

同 思ふ了ふことこけけけけけけけけけけけけけけけけけけ

同 世の中お狩右の月なすてやふまふもともぬア一な

同 尺えもせぬふうき心をかたてて人おあちゆとおもふ地かは

指遺 春日野の萩のやれ糸あもるもえんぬなまゝ春をわはれな

よあ

岩のちきりもたえぬ——あくるまひさかづらきの神

これトも將この類なり

せまたま辞の事

言ふつくせりたり辞ハ本図にも言は辞のともふあ
けられたぬどもこはつ手の言ふつくせり別み下
必居言のつく格とこころうべしそはせりハ為
而布のつまりたす而布のつまりなれハ唯の言
ふハついつるざること物ふりて山あり河あり山
ふて知れぬ但し夫木集又ひもろき神の心みう

け下れ下ひ下付字稀もゆふかつらヤとあるをもと
かつちを在るといふこと乃あるふあふ下つてあ
る意まいへるまた月せま花せまなどいふといこ
となり古今集廿二まあまわくさびの中山おひふせ
ほそ谷川のわた乃さやんはとあるもおひふ在るとい
ふことをしてあるの意まいへる下上同此例代
これか進又也

十七 おとふとおまとおせよふか下銚たまくもき物まであつる
同六 雪なれが冬こもりやる雪もあも春ふ志下れぬ花と咲く

けらしなトーかトし辞の事

けらしなトーかトし三つの辞、本図にあらざるはも
とらししの約りたるみて別みひとつの辞にあらざれ
ばなりやてけらしハけらしけらしと活く辞のけ
らふらしけらしりてそのららの約りてけらしとなり
なる系りさき必續詞段のあらぬ格ふり又ならハ
ならなりなるたきと活く辞のなるにけらしの係りて同
く約りてならしとなり多るなりさき必續言段の
係る格ありけらしなること上りの詞のあらぬく
へらあす又けらしハ志支久活の久活の續詞段より有
せらよ

といふ詞ふつときて下けれふらしの係りたるみてくあ
つしまりてかとなりらハ上の如くつとまりてから
トとなりたるなりやむかトハはきむくあるらしよ
かトしハよてくあるらしなをさて何れも結はらトふ
異なるおとなし

亭 きくら花咲みらハあ豆川の山のひよりあるまふま
同 おちたぎちたぎのいなこのみと一つも老まらしな
同上 二ひと祿とあるまやなりしよむの夜にけりええつ
同 ちのたてやあつぬきこてよめかト山のやきとわねたかち

言を省きたの、辞をうけたる格

の、辞ハ、あへて言ハの、しか、恠辞ヲ、了詞ヲ、かゝること
ハ、たえて、あト、ぬ例なる、ふ古今集十四ノ、君や、こむ我や
由、うむ、の、い、よ、ひ、お、格、の、板、戸、も、さ、い、び、祢、ノ、ル、ヲ、後、撰
集、十四、ノ、夕、さ、ね、ハ、思、ひ、を、去、け、き、侍、人、の、こ、む、や、こ、ト、や
の、定、め、な、け、き、な、ど、あり、この、類、の、み、を、詞、玉、緒、ハ、用、言
より、受、た、る、の、と、い、も、ね、た、り、然、れ、ど、も、の、辞、ハ、言、又、の、い
か、い、了、詞、ハ、かゝ、恠、こ、と、も、辞、の、下、ハ、合、は、る、こ、と、も、あ
ら、ぬ、と、は、その、理、あ、る、こ、と、も、了、了、は、の、本、つ、意、を、音、義
子、より、了、お、し、極、む、る、と、き、ら、明、な、り、義考、又、く、は、い、く、辞、音

へ、お、け、里、島、守、部、の、説、ハ、こ、れ、ら、り、乃、い、と、と、乃、上、ハ、あ
合、せ、し、よ、里、島、守、部、の、説、ハ、こ、れ、ら、り、乃、い、と、と、乃、上、ハ、あ
る、言、を、省、き、了、其、言、に、り、了、了、の、お、了、古、今、な、る、君
や、こ、む、我、や、ゆ、ク、等、と、互、の、い、さ、よ、ひ、ま、と、い、ふ、了、互、と
い、ふ、言、故、省、き、後、撰、な、る、る、こ、む、や、こ、ト、や、の、占、の、定、め、な
ル、れ、バ、と、い、ふ、了、了、心、の、占、と、い、ふ、言、を、省、き、た、る、な、里、と
い、へ、了、了、お、さ、る、こ、と、な、る、り、了、了、の、り、了、了、下、り
い、へ、了、も、了、い、れ、り、了、了、の、り、了、了、下、り
べ、り、了、了、の、あ、け、の、云、々、ま、た、り、了、了、の、り、了、了、下、り
バ、の、な、ど、も、猶、此、類、り、了、了、の、り、了、了、下、り
の、辞、の、か、い、了、了、の、り、了、了、下、り
了、了、の、り、了、了、の、り、了、了、下、り

バ、辞ニッ重ふる時一ッは續詞段ニ云例

此、辞の重りたるときは一ッは續詞段のひッへて猶も
の意を含む例あり後撰集一ハ松もひきてるふもつま
びなまぬるもいつしりやくらもやもさりぬむとあり
こ此則松もひのびてあなもつまびといふ意れる字一ッ
ハひきと續詞段のひッひる趣たるなりこの格物語文の
多をり一ッスハ漢籍訓にも此格ありそは不飲酒食肉
など訓めるも酒も吞び肉を食むの意れり都て漢籍訓

といへども古の博士の訓おるハ彼方の意も適ひ
此方の語格も違わざるやうに訓るを後の儒者ども
のやからお訓い改めたるはのみなきひのことの
も多きぞよし然れども古点といふかきそハ古の博士
の訓失るまくなるが残りて語格の学の心えおなるべ
きことどもサケトひを一ッ二ッいも詩経の蔽芾甘棠
勿剪勿^{ハキツク}召伯^{シヨウハク}所^{トコロ}芟^{シラ} 漢家古高本ハ引リ 訓リト 上れそい
とよく適ひぬる訓なりそはまづ勿剪をなきりてと訓
めるも正しく召伯所芟をよとせしところと訓めるも
ことおまら子雅しき訓なりやとせり一ッをやどり了

ありーといふ詞の活よて召伯のむくしやとりてあり
し不をさしたるが慥よよくかな危りさてま多古文帰
去來の文よ歸去來田園將荒れ今ハカヘンヤシト訛と訓
る本もいと正しき訓よて古り訓の残りたるならむお
の二つのなむ願ふ意のなむと行末をおしてうる意の
なむとを訓いつけたるもいと正しくめてたしとた
、へつ危くおむさは初のおむハ帰去來四段活の歸ト
むくへりかへるかへれと活く詞の未然段のかへトと
いふ段おなむの辞もうけたるもて則願のなむなり次
なむハ將荒のなむ下二段の活のあれあれあるありあ

るねと活く詞の續詞段のあれといふなむの辞をあ
けたるもて則行末找おしをかる意のなむなり然段
かゝるなむハ類の意統詞段ハかゝるなむハ行末をを
しもかる意なることは上ハハへるがことし
この外猶いと多し近世行ハるハ点本ハつハヤうな
しなへる訓点のことハおのが学則の中他國の學よも
がおほし訓点のことハおのが学則の中他國の學よも
必語格もあられたりひがこと多しといへる条よ危り
まゝ近世行もるハ訓点復古なむものよいへるも
見て志るべし今ハ世ハ行ハるハ漢籍の点本みよ道春
都賀技春ガソハることハ道春点ど稱するハ昔より行
もれて人琢ハハるハ文思ハとも経字の凡下ハ行はるハ
初ハ下らざるハ訓点ハ兼るハ共ハ皆古傳のよハて民家
ハ下らざるハ訓点ハ兼るハ共ハ皆古傳のよハて民家

バとソ屋るはまこ
とよさるることなり

歎辞のなもヤ事

なもヤの三つ々ともに歎息の辞又て何れも相通ひて
断止段ふかゝる格なりなハうつまふけりなおももド
なゝなゝななどのななりかはさひしかなゝかなど
のななりヤハ上ホいへるがこと
の差別この本の三ツ
をいへばいやいふつ
異なりてい別又いへる

亭 花の色るうつりまをいたつて我身よふやるなめあかに
後拾 ちきりきなあたゝ神を三つづつまの松山良きいどとは

亭 あよりを井をよりてりハのやとほやがること
拾遺 ちきりきなあたゝ神を三つづつまの松山良きいどとは

同よ辞事

歎辞のよハ續言段ふハは辞とてうれきよるなり
きよちきりしよちきりきとふときりちなど云例ふ
り然又未然段の辞のぬぬと活く辞マのよを續言段
のぬ又ちかから断止段のぬふかゝて思やハよてい
れ知よなどいふ格なり但し若辞合はる時ハなよ共
いよもちかかれと知なともぬぬことおよくしてろえおつたれ

片迷ふことあり

冠辞、断止段、了云例ある事

四種二種の詞、凡て續言段より言のつゞくべき格あるを冠辞、續詞段又断止段、了ても下の語をおこし例あり。いは百たらぬ五十など、いは下而みらぬ五十といひあつれふる遠江といひもであらきふり。遠江といひいかなとふ海といひもでいかなとり。海といふ類なり。余、準へて知るべしや、或るや唐おし下るや難波なとや、了てきりて下の語を矣、此も同意なり。うちうちやふ

か神なき續言段よりつゞき、或るや唐おし下るや難波なとや、了てきりて下の語を矣、此も同意なり。

對へていひおくる格の事

對へていひおくる語は續詞段、了ておくり重ぬ了結といふ。了て断止段、了ていひをさむる例なり。たとふは古今集序、天地もうかかし。めふええぬおふりもも何とれとおもさ。せ男女の中をもや、おらげたるきら乃、子の心をもなくさむるは、おをり。まご歌、了ても、手のふといひ、ルふとくら、了て云々など、のごとし、此外いと例多きことあり。

續言段も重ねるときは續詞段となる事

續言段の詞をえりきりなきはなかやぬいふとき必詞につく格とある次引る證歌よりて考へて
尋上のれお下ひつゝあゝまたこの浦のあまなぐまをよほりて
控世よのすゝもぞもうなき白雪のつらきえぬるとのと走るく
後拾六かゝる木のもろのふ草もれごとよなほれめとやまゝもるをえり

や何とやぢむる格

やの係をいつらいつこたれおど疑詞にてとぢむる格

ありくもくは三集類辞まつどたるをえりて
大亭 玉多れのおかえやいつらよるきのいそげ沖お下おり
同 ちるぢりたてるやいほこみよけよみ山は雪をやりん
具ゆや^はと屋を去るもいをなごらむなてやあはれおは
まゝをらふ斗りのあや何なりていごもてめりいとのや何なり
などの類も暫くは格とあるるに類し

なその辞ノ事

なとかかりて知と結々々禁辞も必知とやぢむるみ
上小なと有べき格あり然るに近世の歌も知とのしあ

リてなを畧きたるがあるもいみじきひふことなりふ
ふ勿の意あれこれ畧きて其詮なした、一そを
省きたる例あり万葉四我もおもふ人もなて此
おほなはふ浦ふく凡のやむけなかれとあるがこと
六帖ふせかせこがふりけえつ、なけくむこよひ
の月夜玄たなひ、さでこれなを畧きて下おそとの
いへるがひがことなり下のそを畧くとも上のなをば
省くべかりぬ格ふなむこは詞の玉緒ハいれれたるお
むきなりくはしくわかの書
ふよりて志るべし夫木集ふ牛の子ふおまるな庭の
たつふり角あれはとて身もばれいそこれちも同誤
りなけてま、此の如所の辞、本図又て畧詞段の辞

ふ下おもひなでひそみたまをてそなといゆるま
とは一きこともなかまど人ふはれそ花なちらそ
なといゆる人また花おどの言の下をなふて受たる
ことく風とぬきこゆまともなる必詞の下を受くる辞
ふ下人なでいれそははれなその意お下なそともふ
でいれといふ詞の下ふつゞきたるをいれといふ詞
の上下ふなそを引けておきたることき意とよきま
おく屋し上ふいゆるおもひなでひそなともなり實々
おもひといふ詞の下を受けたるよるあらで猶てひと
いふ詞よりつゞきある辞あり

いむるのいあを忍せむや木の二首の外又あまらば
はれは断止段よくる字正しとれ直し

願の意のこそ事

願の意のこそハ必續詞段みかりてこそ断れて
下へハつゝかばれば別々此こそを結べる詞をあらぬ
格ふり

万葉五字のまぢうてふせ梅の花ちらひありこが「おもふ子が為

同 興 あまふまの月よしをとりまひさせむよひのなやせよあまきこ

同 かいつあそびのこが「草木を春にまうつ秋をみれやく

同十 おもふ子が衣たむにふはひこそ「志まのまき秋たむと

断れたる如く聞えてきたるおまあトぬこそ事

古今十四よつのはふりなるおもも交山城のともを

あひしむことをのこが「万葉十一ウセド「哥いきのを小我

いおもへど人めおほいこそふく風ふあははさむく

おふべきものをなといへるこが「はふとうちき、て

格の如きものかト此こそよて切れたるみあト文そ

は古今なるいあひしむことをのこが「オモへと會い

万葉なるあ人めおほいこそアハネと會いたるなり此

格猶あり、のえわ、登

こそ係を裁、辞めて結ぶ事

并こそ結正一からぬ事

此、係をももの裁意のを、下結べる例あり然れども三代集より一首も有ることなくそれより後といと稀なる例なり然れを正しくいふ例とこゝろえて古の心ありむ輩ハこゝろいべきことぞかし

千載 一 よそふとそれぬるこれ君よこれ又せもやとおもふ袖の巻も
續考 志たふ判人のころもうつらやをいふやせたる山やくらえれ

まことれをといへるもあり

新載 志たふ判うよひとれをいふ志下にはのうまけのうきあたるも
同七 たえ判つえしとれを裁身よみなはとむくを関の巻
また和と結べるもありこれものもの意の近

集十 ソノ一、月をのこそなうたふ今いをもあつ我身んルを
新恒集 めめれいれなくやめせ郎花人志しれ三判をらむと足ふ
こせらハこと正一か、文まこ

後拾 十九 信懐をらこの系ふこをあらぬも我よきと今、判する
新六 和歌の浦よ家の風判をれどもはまら月ふえんを
五二 ちきりこゝ思三判とまんなりぬまごやとたたえぬあ虫の聲

これらに已然段のぬれぬれにて受なむその段の
ど、辞をもて下ふついで多きは正か下交らば
ふまどきことなり 詞の玉緒よりこの外と受る
流れたとまる 格として後十八世に記したる
三 此の多きやぬむの床よりえびと
うつ なりやむと引れたれども
これらはいみじきあやよりなるも

未然段小かゝるぬバ辞清濁事

見ぬ ハ。聞ぬハ。などのハ。未然段のぬぬと活く辞の
ぬ ハ。同段のぬ、辞のかゝりたるハ。下上ともなき子古言
清濁考 ハ。ハ。ハ。もとぬハ。とすしてよむへきを濁りて

いふは漢籍訓ニシを音便みそ屋たるからぬ ハ。鼻音
の ハ。引れたハ。濁るよりおこることなりとい屋
鈴屋の大人もぬ ハ。とぬて訓れたぬとは必濁ら
ざれば適もざるよしあり そは助辞音義考ハ。を
いへ ハ。このハ。本図の畧標をつくるハ。え

がて、辞の事

がて、辞ハ續詞段小かゝる静辞 マ。ア。ヤ。とを
ぎ 列。て。み。なく。君。ハ。二。ひ。つ。い。り。ぬ。て。ハ。ぬ。く。る。な。ど。い
る ハ。い。こ。とも。なき。を。万葉集卷二。ハ。有勝麻之。母。同卷。ハ。知

勝カサ奴ヌ鴨カモ いとはほ巻々 など未然段の辞のかわれる例ありこ
ハ静辞シヤウジ又未然段の辞のかわることといふなるが、
きも此ながし然らばそのかての辞ハもと下二段
奴音ヌネ又かぬかぬかぬれと活く詞みて可ぬのぬ
を韻ウチして扣へてかてと云居て静辞シヤウジ又なれるなりカ
と轉マるルとき加音濁音カネハかて忘ワスレるルハありかてま
るル上ウヘの詞コトよりひきつヒキツけケなり忘ワスレるルハありかてま
しシも忘ワスレりかてぬヌもなとつへる方カタを云居て静辞シヤウジとな
れる方カタ又ハあしでその本もとの下二段の活詞カクジのま、なる
またかぬまカかぬぬなどいふ小同コトトくがてまマかて
ぬなど未然段の辞ジのかわれるなり云居て静辞シヤウジとなれ

る方とハ別わかふり思おもひ混まぶべべるト交ま

べらなりとつゞく辞の事

べらべら辞ジハ断止段ツグハかゝる静辞シヤウジなるハ續言段ツグハかゝる
属辞ツグのなりなりの係りてべらべらなりといへる例れいかふしこは
べらべらハもと志支シ久活クの属つよてべらべらきべれと
活カクく辞ジをべらべらと轉マしたるなりト志シあるなりときは居言イの格カク
となりて續言段ツグの辞ジのかわれる格カクとなるなりハ志支シ久
活クの久活クまたせくもせくもやきもやれと活カクく詞コト
をせくもと云居て風早フウなりなりふと續言段ツグの辞ジのかわ

をまたくいふをいやくふむをふまくのるをのらくな
どの類なり下まを音のつけるみてあきくをきかひな
ハをなやハまつをまたいいふをいふむをふまハ
のるをのらひなどの類なり下みふ音のつけるみては
ぬくをぬらふむをぬまふやむをやまふちるをちら
ふやるをやらふなどの類なりはていづれの延詞も字
韻より必阿韻ふやきてくをふの三音ふわくことハお
のづかト然あるべき奇しく妙なる理あることそハく
ハえくは活用本義考みいへりま言聖妙用延詞図又
も合せてこゝろうべし

二重約の事

二重小約をたる詞その例いとおろしそハこひ半けむ
のも命をけむことろえけんむなどの類なりこれハ
志支久活の續詞段より變格活末然段あらといふ詞の
つゝきてその段のむ辞まで受たることをみてたとへ
ハをしくあむとつゝきたる詞のくあのかと約りそ
のかとあちら再約りてかとなりそのかを一音進てけ
むとなれるふり別は二重約図一枚あり合せ見べし

古体の歌小志よていひさして餘情を會む格

古事記神武天皇の大御歌はあゝ原の志けこきをや
あがたゝしいやちやいきててがふたり收レけしを記
傳よてふのがを志みて結ひ給ふとあり

上よひとついへる言を再いふとき、辞は會て聞
る格ある事

栄花物語月宴古今集廿卷えりと、のへさせ給うて
世よめてたくせさを給ふ今まで廿餘年ふり古の今の
古き新き歌えまとのへさせ給ひて世よめてたうせ

させ給ふ

怒集人つまとののたとふたつ思ふなれこし袖にあれ
手載十一大うぬのこひぬるくよきなれてよのつねのとや君おむす
伊勢集 梅のわの傍ある舟をなむしなぬくとし子題るて

舟のよふちりかゝられむ梅の花雪の中のをとらると又るべく
仁皇名 くりりつのもまねどまらひよの葉もまかりルヤ
めでたかりルヤ

最希より常の格に異ふる居言ある事

居言ハ前サキより厚るひとく四種詞とも子續詞段を云々

今又衣ものひつ
しありなむとあり
これ子同例

又下言といはる格なれどもいといと一稀なる断止段を云
居たる言もありては常の格にてはほたりといふ
へきをほたるといひ潤ゆるひといふべきをうるふ
といひ蓬生などいよもきひといふべきをよもきふと
いふ類あり人の名源順渡也競など凡て断止段

已然段のりも辞の係る例ある事

本回ふてゑ已然段に係る辞はむとや三ツのみなれば古
今集十三山科の音羽の山のおとみだふ人の走るべく
我こひぬめりととあるかもハ一本ふやととある方正し

かゝむと思はるゝに古今集序のいふへをあふきて
今をこひざりぬのとあるちいつれの木ものた下
やとある本ハ又あたらしいといふかいつハあり
ハるよよくおもハ古事記中巻又そのつばいり月ま
たてハ宇多比都々迦美祁礼加母麻比都々迦美祁礼加
母とあれば已然段のの辞のかゝる例あることて
ろえおくべきことなる

こせぬるもとつゞく辞の事

万葉二よありこせぬるも同五よづきおせぬるもなど

佳馬樂^{伊天}文^我
 已^未波^也又^由支^已並
 万^川知^也未^安波^礼
 万^川知^也未^阿波^礼
 万^川知^也未^万川^長
 万^川知^也未^支天^波
 安^波礼^由支^天波^也
 見^方とある^言せ
 本^又と^同く^言せ
 一^と者^き爲^も合
 一^と願^い意^{あり}
 一^とは^万葉^二
 一^と吾^約早^去欲^亦
 一^と山^待侍^き云
 一^と連^見年^もある
 一^と二^は凡^百葉^二
 一^とあり^をし^もて^一
 一^との^言せ^の意^{あり}
 一^との^言せ^の意^{あり}
 一^との^言せ^の意^{あり}

ありこのこそといふはこそそのそを省きたるみて万
 葉四ふいぬふ又去て^言同^五又梅花^ちら^ばあり^言同
 六又五百^夜つぎ^言同^七又我^よつけ^言同^八又^言同^九
 く多くありて願の意のこそなりさき^言の^言は^り
 こその願の意の專^言この音の方^言具^言たれば^言の^言意^言も^言具^言
 たること^言助^言辞^言音^言義^言考^言そ^言音^言省^言きて^言も^言同^言意^言なり^言は^り
 ぞを省き^言こ^言も^言い^言ひ^言ん^言て^言夫^言を^言再^言兼^言格^言須^言音^言なる^言爲^言の^言詞^言
 もて活用^言え^言たる^言なり^言爲^言の^言詞^言を^言居^言言^を活用^言仮^言令^言バ^言も^言い
 ぢも^言い^言づ^言と^言上^言二^言段^言又^言活^言く^言詞^言も^言い^言お^言と^言云^言居^言て^言も^言い^言ぢ
 一^とも^言し^言ち^言び^言な^言と^言爲^言詞^言又^言下^言再^言活^言用^言した^言る^言が^言こ^言と^言一^言と^言い^言ひ^言ぬ^言

去^言れ^言か^言な^言ど^言然^言る^言言^世ふ^言こ^言の^言言^世の^言言^世の^言言^世
 い^言と^言お^言ほ^言然^言る^言言^世ふ^言こ^言の^言言^世の^言言^世
 たる^言なり^言な^言ど^言い^言へ^言る^言言^世い^言と^言も^言鹿^言漏^言き^言こ^言と^言なり^言お^言そ^言
 ぞ^言の^言轉^言なら^言む^言又^言あ^言こ^言そ^言め^言か^言も^言と^言こ^言そ^言よ^言め^言辭^言の^言つ^言づ^言
 處^言ふ^言く^言て^言あ^言適^言ひ^言難^言し^言い^言の^言で^言然^言つ^言づ^言づ^言き^言こ^言と^言あ^言は^言め
 や^言ら^言また^言万^言葉^言八^言又^言ち^言り^言あ^言は^言な^言や^言免^言同^言十五^言又^言こ^言ひ^言ぬ^言る
 道^言よ^言あ^言ひ^言こ^言は^言な^言や^言免^言な^言ど^言ある^言も^言ぢ^言り^言爲^言よ^言上^言又^言同^言
 鈴^言屋^言大^言人^言云^言こ^言そ^言願^言なる^言も^言こ^言り^言な^言と^言い^言へ^言ば^言こ^言は^言別^言
 又^言た^言勿^言し^言と^言ぬ^言が^言ふ^言こ^言ら^言よ^言なる^言なり
 又^言あ^言ら^言も^言い^言たる^言も^言の^言一^言枚^言あり^言合^言せ^言見^言べ^言

見^言ふ^言ほ^言と^言つ^言づ^言く^言詞^言の^言事^言

万葉三ノ見おほし山仁徳紀みおほしとのまた万葉十
一ノ見おほし君など又えたるを世お又ほくほしきと
同し詞といへるる例のいと鹿漏アウキことなり又よくほし
きト一段の活の未然段よりその段のけしひの辞のつら
きてそのおほくハ續詞段の格よて定まのこしくおしき
といふ志支久活のつらきたるよて詞のまゝなり然る
を又かほしといふ方は見をいひぬえて言ひ辞なるが
を係けしといふ志支久活をも共よひぬえて又か
おし物見かおし山など一つの言ひいへるなりこの差別
をこゝろえおほく重し

得の活用の事

得と云詞の活用ハえうらうれと活きて下二段の活
がまゝ下既く詞ハ衢ハ阿行下二段の活とてあから
れたり然れども阿行ハ他行ハいたく異なるゆゑあ
りて言ふも詞ハもなることなくまた詞の中下よつ
ことなくも他詞の阿行の音の上おつときを自然
者れもしていととて奇しく妙なる理を具たる行ハ
下詞の活用もこの行ハ活くべきこと絶てありぬこと
なり然るを世人さる所は心つらで唯ハちまたおよ

リて得ハ阿行の活との心得たるが多き中稀々小
物よく見知りる輩はうくはありとまで心づき
ながくいにかよとも定うねて居る輩もある
然る小廣薩筋ハもやくことをおもて由宇二音
行行
リな雜リ活きたるつて之ハ由音の之ハ宇音の
なり
はれば変格の中小入れべき詞なるをえむらく
下二段
の活ヲあげおくとつれたり猶考ふべし
おのれは
るこを廣薩筋の變格の中小入るべき詞とい
はれり
うべなひの多し變格とソハども他行の音の
例あり
こと絶てなきことありハ志支久の活の例
あり
おもへど彼一種の詞ハ物ハ形状ハ限りて事
業は
のりたるといふ詞ハ則業もいふ詞ハ志支久
活ハ

おきと活くをこの得を由宇の音とあるとき
より同音のきみ活ききより同音のき
は音ハ更なり韻も異ハ下流音の一行も中
間は隔たり
れハ志支久活例ハ異ハ下流音の一行も中
間は隔たり
下ニ段ハ本音を除きて九行の活ハ九行の音
限り
活ハ別々一行あるは九行の活ハ九行の音
限り
この廣く種々の詞ハ活ハ九行の活ハ九行の
音限り
この行の活ハ九行の活ハ九行の音限り
あり
リとをえるべし久音ハて得と云詞ハと活
ハ九行の活ハ九行の音限り
之ハ十音義をもて考ふと思ひハ又ハ九行の
活ハ九行の音限り
な凡れハ和行の之ハ約ハ又ハ九行の活ハ九
行の音限り
とも考へえむ後人よく考へ
てよき考へえむ後人よく考へ

此書... 卷之... 第一... 第二... 第三... 第四... 第五... 第六... 第七... 第八... 第九... 第十... 第十一... 第十二... 第十三... 第十四... 第十五... 第十六... 第十七... 第十八... 第十九... 第二十... 第二十一... 第二十二... 第二十三... 第二十四... 第二十五... 第二十六... 第二十七... 第二十八... 第二十九... 第三十... 第三十一... 第三十二... 第三十三... 第三十四... 第三十五... 第三十六... 第三十七... 第三十八... 第三十九... 第四十... 第四十一... 第四十二... 第四十三... 第四十四... 第四十五... 第四十六... 第四十七... 第四十八... 第四十九... 第五十... 第五十一... 第五十二... 第五十三... 第五十四... 第五十五... 第五十六... 第五十七... 第五十八... 第五十九... 第六十... 第六十一... 第六十二... 第六十三... 第六十四... 第六十五... 第六十六... 第六十七... 第六十八... 第六十九... 第七十... 第七十一... 第七十二... 第七十三... 第七十四... 第七十五... 第七十六... 第七十七... 第七十八... 第七十九... 第八十... 第八十一... 第八十二... 第八十三... 第八十四... 第八十五... 第八十六... 第八十七... 第八十八... 第八十九... 第九十... 第九十一... 第九十二... 第九十三... 第九十四... 第九十五... 第九十六... 第九十七... 第九十八... 第九十九... 第一百...

